

## (2) 父が教えた実証主義的な考え方

加藤の父信一（1885—1974）は、埼玉県北足立郡中丸村（現北本市）の農家の次男として生まれる。加藤家は江戸時代から続く名字帯刀を許された豪農で、10万坪の畑と（このうち9割は戦後の農地改革で没収される）、山林と3000坪の家屋敷を所有していた。県立浦和中学校を卒業後、第一高等学校を経て、東京帝国大学医科大学に入学。青山胤通のもと内科学を修め、1911（明治44）年に同大学を卒業する。学友に正木不如丘や齋藤茂吉がいた。卒業後は青山内科の医局員に就き、医局長にまでなる。しかし、青山の後継問題が生じ、医局と当局の対立に巻き込まれ、結局、加藤が2歳だった1922（大正11）年に、学位を取らないままに大学を退職する。

開業医となるが、大地主のもつ気位の高さと、性格の不愛想さと、容易に病名を断定しない医学的な誠実さが相まって、まったく流行らない開業医だった。その数少ない患者に、フランス文学者辰野隆一家と安田財閥の安田一家、そして編集者で文学者だった風間道太郎一家などがあった。

自らを不遇と考え、知人友人との付き合いも稀だった父信一は、その不遇と孤独の埋め合わせを息子に求めたのだろう。加藤に対して、ことあるたびに徹底した実証主義的な考え方を教えこみ、加藤はそれを理解し、理解する喜びを味わった。こうして父親から教えこまれた実証主義的な考え方は、加藤の生涯を貫く信条となる。加藤に対して圧倒的な影響を及ぼ

したのは父信一であろう。それゆえに加藤にはかえって父に反発する感情が強かった。(写真：父信一に抱かれる周一)

父親の教えたあまりに一辺倒な実証主義的、合理主義的な考え方に、加藤は満足していたわけではなかった。その父子の関係を象徴的に表現したのが、『羊の歌』に言及されるゲーテの詩「魔王」である。



「おとうさん あれがきこえない?」「おとうさん あれが見えないの?」「おとうさん おとうさん 魔王がぼくをつかまえる!」と訴えるが、お父さんは、子が見ているものが見えず、子が聞いているものも聞こえず、ついに子を失う。おとうさんは父信一であり、子は自分である、と加藤は理解した。しかし、加藤には母織子がいた。母織子によって加藤は、魔王から逃れ、救われるのである。

もうひとつの問題もあった。それは父信一の社会認識である。加藤の家では、食事や団欒のときに、政治問題を話題にすることがよくあった。その話題はいつも父信一がもち出した。ところが、中学生・高校生になると、父信一の話すことによって、事態が解明されたという実感を加藤はもつことができなかった。

あるときには、あまりに当然と思われ、あるときには、私とは別の時代に育った人の奇妙な感情的反応にすぎないと思われた。事件と事件との間の関係が、父の話を通じて明らかになるということは、ほとんどなかった。(中略)明日がどうなるかわからぬとい

うことは、父の世界の本質そのものだった。(『羊の歌』「二・二六事件」)。

加藤は父信一の専門領域における徹底した実証主義的・合理主義的な考え方が、専門外の世界ではまったく生きていないと考えた。1930年代の日本の状況について「十分に考え抜いてはいなかった」と、日本の知識人に共通する弱点を見てとるのである。加藤は父信一を反面教師にしたといえるのかもしれない。

父信一はまたいわゆる「文学青年」を蛇蝎の如くに嫌って、文学を好むようになった加藤に不満を抱いていた。しかし、信一に文学趣味がまったくなかったわけではなく、自宅書齋に『万葉集』註釈書を置いていた。この註釈書が加藤の文学への関心を芽生えさせてゆくひとつの契機になった。父信一からすれば、まことに皮肉な結果だったに違いない。